様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８７６

研究課題名（和文）「生きやすさ」の談話分析：移民としての在英邦人女性調査からみる多文化共生への提言

研究課題名（英文）Discourse analysis of seeking comfortable life as migrants in a multi-cultural society: A case study of Japanese women living in the UK

研究代表者
秦　かおり（HATA, Kaori）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：５０２８７８０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、在英邦人女性を多角的・包括的に調査することによって、これから国内で増加が予測される国際結婚や移民との多民族・多文化共生の意識改革・方策を提案する事を目的とする。
　概ね順調であったが、2016年の英国がEU離脱を問う国民投票で研究が大きく変化した。これまで英国で潜在化していた移民差別が明示的に生起し、日本人移民にも影響を及ぼした。調査の結果「社会変動期の新しい秩序」において移民は自らを「善良な移民」に位置づけ、招かれざる移民を生成する。つまり大枠組で見れば、差別の細分化が起こる。このことは既に到来している日本の移民社会のロールモデルの１つとして警鐘を鳴らす大きな成果と言えるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study aims to propose how we can deal with the multi-cultural society which has already come to Japan, applying the case of the UK. In 2016, the UK had a referendum of the Brexit, which revealed ‘potential’ discrimination to the migrants including the Japanese women living in the UK.

As a result, they were seeking positions in their local community they belong to. They categorised themselves as migrants but sometimes divided ‘migrant’ into several categories in order to be in the ‘good’ migrant group. It shows that social change leads to the reconstruction of the identities of minority people who need to manage to find a position to adapt to the new social order.

研究分野：談話分析、ナラティブ分析

キーワード：Discourse analysis　Migrant　Japanese women　Narrative　Participation framework

１．研究開始当初の背景

当該科学研究取得当時、日本においては、政府は少子化対策として女性に子供を産むことを求めつつ、女性を社会的労働力と見なして保育園の拡充を図るなど「女性の社会参画」を推進していた（池本 2003,2009 他）。しかし、妊娠中・出産後の女性への不平等な扱いや暴言（杉浦 2009）はやまず、移民についてはヘイトスピーチ問題など、日本国内における社会的弱者に対する環境は、多民族・多文化共生を奨励しているとは言い難い。

それは実施報告書を記載する３年後もマイノリティや社会的弱者を虐げる発言が多々散見され、なんら改善されていない。

しかし移民問題そのものはこの３年間で劇的な変化を遂げている。研究開始当初の背景としては、国内外で移民研究というと、「虐げられる人々、逆境の人々」として問題提起を行う研究（森田 2007, Back 2007）や、移民のアイデンティティ研究（島田 2009, 三宅 2013 など）が中心であり、日本人移民の動向を日本の社会問題と直接結びつけて問題解決に還元させた研究は数少ない。本研究はそこに着目し、多民族・多文化共生を可能にする規範意識や施策を模索する。

本研究そのものの背景としては、2007 年より国内在住の日本人女性に出産・育児体験を聴くインタビュー調査を開始し、2010 年より在英邦人の出産・育児体験談をナラティブ研究の手法で調査してきた。2011 年、2012 年には同コミュニティに所属する英国人女性にもインタビューを行い、社会的弱者であるはずの移民で女性である在英邦人が、英国が「暮らしやすい」「育てやすい」と言う所以は何か、それをこれまでの国内調査と比較することで、日本社会がなぜ「生み育てにくいと感じるのか」、その問題を浮き彫りにしようとする一連の調査の一環となる。

２．研究の目的

本研究の目的は、主として段階的に２つに分類される。

⑴ 国際結婚を機に自ら海外に暮らす選択をした永住権を持つ在英邦人女性が、アイデンティティは日本人でありながらも、移民として英国で暮らすことを選択した理由を、多角的・包括的に調査することである。日本にはない（と彼女らが考えている）「過ごしやすさ」「生きやすさ」「育てやすさ」とは何かを明確にすることで、日本の産み育てにくさの正体を浮き彫りにする。

⑵ これから国内で増加し続けることが予測される国際結婚や移民との多民族・多文化共生のための意識改革・方策を提案することである。英国においては移民である彼女らとその子供たちを継続的に調査することで、移民先進国としての英国を１つのモデルとする。

３．研究の方法

⑴ 理論的枠組みとしては、これまで分析ポイントとしてきたインタビューに現れる語用論研究の視点、Positioning 理論（Bamberg 1997,2004）や Small Story (Georgakopoulou 2011 他)を中心としたナラティブ研究の視点、言語・非言語資源(McNeil 1992, 2004; 片岡 2013)を包括的に分析するマルチモダリティ研究の視点が中心となる。

⑵ 特に本研究で用いる考え方の特色として、相互行為的ナラティブにおける、相手に伝える「総体的ナラティブメッセージ」とは、言語のみで成り立っているのではなく、身体動作などの非言語行動、人物配置、場所など、全ての要素が合わさることで、相手に伝えられる総体的メッセージが構築されると考える。したがって、それを分析するためには上記の全てを分析の俎上に乗せる必要がある。

⑶ 分析の際はそれらを書き起こすが、計画当初の書き起こし方法は基本的に CA(会話分析)の書き起こし方法を用いたが、マルチモーダル分析に適切な ELAN の使用を開始し、途中から基本の書き起こしは ELAN を用いるようになった。データの保存も二次的保存は ELAN による保存となり、他の科研プロジェクトとの足並みを合わせる結果となった。

⑷ 具体的な調査先は、2010 年から継続して調査を行なっているロンドン南東部の日本語互助会・日本語補習校・ママ友グループへのエスノグラフィック調査、在英日本人女性への継続インタビュー・家庭内会話の談話分析、メディア利用調査とし、その結果を分析・考察した。

４．研究成果

本研究は、国際結婚を機に自ら海外に暮らす選択をした永住権を持つ在英邦人女性を対象に、移民として英国で暮らすことを選択した理由を、多角的・包括的に調査することによって、これから国内で増加し続けることが予測される国際結婚や移民との多民族・多文化共生のための意識改革・方策を提案する事を目的としている。

基本的には当初の計画通りに進んだが、計算外だったのは、計画 2 年目の 2016 年、英国が EU 離脱を問う国民投票を行ったことである。英国内でこれまで潜在的にくすぶっていた移民差別の感情が表出した出来事であり、いわゆる移民である日本人女性にも大きな影響を及ぼした。（彼女たちが過ごしやすいという意味での）多文化共生のモデル社会の１つとして考えていた英国が、一気に形成逆転した出来事であり、むしろ悪しき教訓として受け止めなければならなくなった。

調査者としては出来事の事前・事後の継続調査をしている者として十分調査に活かす方向に研究をシフトし、2 年目と 3 年目はこの点について大きく取り上げる結果となった。調査の結果、「社会変動期の新しい秩序」において自らを positioning する移民たちは、語りにおいて「そこにいて良い移民」に位置付け、そこにいてはいけない移民を生成する。

つまり、大きな枠組みで見れば、差別対象の細分化が起こる。おそらく、ここで差別対象にされた移民に聞けば、さらなる細分化がなされることだろう。

これに拍車をかけた要因は、国民投票の後のメディアである。各種メディアが様々な要素（学歴、年齢、居住区域、年収、人種、男女差など）で投票の傾向を出し、大々的に報道し続けた。これが差別を助長したと言える。

これらのことは、もうすでに到来している日本の移民社会について、一つのロールモデルとして警鐘を鳴らしてくれることは確かである。その意味で、当初の研究計画での予測とは異なるものの、移民問題という意味では大きな成果があったと言える。

本研究は 3 年計画である。以下に 1 年毎の成果を記す。

＜1 年目：2015 年＞

⑴ 1 年目の特徴は、これまでの研究成果からは見えて来なかった、就学年齢に達した子供を持つ保護者の日本へのステレオタイプ化と、「ただそこで生きている」という、移民としての現況の受動的甘受が浮き彫りとなった点である。「日本へのステレオタイプ化」は比較対象としての英国文化（特に学校教育）があるからこそ、日本文化の細部よりも全体像が前景化するのではないかと考えられる。

一方、移民としての現状の受動的甘受に関しては、自分たちが移民であることと、現在ヨーロッパで起きている難民・移民問題とを切り離して考えていることと無関係ではないだろう。この時点では、移民問題は他人事だったのである。メディアで表象される「移民」と日本人移民の現実はそれだけかけ離れた状況にある。しかし、その中でも丁寧にことばを拾い談話を分析していくことで、多文化共生への難しさが垣間見える。これらは特に学校での子供のいじめやバイリンガル教育の難しさに表れた。現代日本の学校教育現場でも日本語を母語としない、日本文化を文化的背景としない子女の対応が課題となっており、今回の調査で表れた点は、本研究の課題である多民族・多文化共生社会への提言の大きな一歩となるであろう。

⑵ 本研究の 1 年目の計画は、①互助会・補習校・ママ友グループへの調査、②協力者へのインタビュー・家庭内会話の録画録音、③メディア利用調査、④成果報告と意見交換であった。

① 互助会で実際に日本語教師補助として参与観察を行った。補習授業校調査については 10 件の保護者へのインタビューを実施した。また、ママ友グループに関しては 2 件のインタビューの他、来年度の予約をとった。

② 上記と合わせ合計 18 名へのインタビューを実施した。家庭内会話の録画録音に関しては、5 家庭に常設のカメラを設置し録画した。その結果、インタビュアーを介さない家族の生の会話を録画することに成功した。

③ 2 つのテレビチャンネルを自動録画可能な機材を 2 機設置した。これは、2016 年度の夏に回収し分析し、分析を行った。

④ Pan-SIG 学会、名古屋社会言語学研究会、国際語用論学会、質的心理学会、日本英語学会、社会言語科学会で成果発表を行い、『Pan-SIG Proceedings』、『共同研究プロジェクト』『言語文化研究』に寄稿した。また、『話しことばへのアプローチ』、『コミュニケーションを枠づける』に本プロジェクト内容に関連する編者、著者として関わり、プロジェクト終了時には結実する予定である。

なお、計画を一部変更した点もある。補習授業校へは一度見学に入校した以上の調査は許可されず、学校付近のカフェ（パブ）でのインタビューに切り替えた。しかしながら、保護者の生の声は想像以上に多様であり、これまでのインタビュー調査では得られなかった多様な日本人移民像を捉えることに成功した。また、常設カメラでの調査では、単にバイリンガル教育の観察に留まらず、家庭内言語政策の実態や、支配言語文化と継承言語文化の間に挟まれる移民女性達のアイデンティティのゆれも観察することができた。

＜2 年目：2016 年＞

⑴ 2 年目である 2016 年には前年度叶わなかった、補習授業校の内部参与観察のみならず、教員、校舎長(校長)へのインタビュー、ご厚意による資料の授受が叶ったことにより、研究に大きな進展があった一方、予定していた現地学校の中学校調査に入ることができなかった。それ以外の点に関しては、学会発表は 8 回を上回り、論文数は 7 点を超える。これらはともに目標としていた数を大きく上回るものであり、この点を取り上げれば、大きく進展があったと考えても良いだろう。

具体的な成果としては、英国にとって近年では最も大きな社会的変動である、EU 離脱に関する国民投票が 2016 年 6 月に行われたことであり、それそのものの結果もさることながら、投票結果を分析していった結果、英国内での学歴格差、年齢格差、地域格差、人種差別、移民差別など、様々な分断と亀裂が白日のもとにさらされてしまったことが移民にとっては日常生活における変化の最も大きな引き金となった。「多文化共生社会イギリス」「人種のるつぼロンドン」といった言説の裏に隠れた差別主義的な言動が実際に行われないとしても「行われるのではないか」という不安と報道がなされ、それが人々の語りの中に織り込まれていく様子が調査からも明らかとなった。このことは、これまでにない現象であり、「多文化共生とはなにか」を問う本研究にとって(当初の方向ではなかったにしても)大きな学問的進展であった。

⑵ 2 年目となる本年度は、①1 年目に取得したデータの分析、②前年度の追跡・追加調査、

③現地補習授業校への調査、④成果発表から成る。
① 主として補佐員にデータの書き起こしを依頼し、それをもとに分析を行った。それらは各種学会発表、論文書籍なとどの成果発表につながっている。
② 前年度からの協力者を含む合計 31 名の協力者を得てインタビューを行った。
③前年度は様々事情から許可が下りなかった補習授業校の内部調査の許可がおり、調査対象校舎の校舎長、教員へのインタビュー、内部 参与観察、(子供の顔が映らない場所での)撮影が許され、調査が大きく進展した。
④ 成果発表については、Pan-SIG、Sociolinguistics Symposium(コロキアム)、日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会、社会言語科学会(ワークショップ)、日本英語学会(特別公開シンポジウム)などで成果を発表したほか、『出産・子育てのナラティブ研究-日本人女性の声にみる生き方と社会の形』(共著、大阪大学出版会)については執筆を始め、本プロジェクト終了時には出版される予定となった。また、引き続き、『コミュニケーションを枠づける-参与・関与の不均衡と多様性』(共編著、くろしお出版)、『話しことばへのアプローチ』(共編著、ひつじ書房) の編集も続けている。

＜3 年目：2017 年＞
⑴ 最終年度にあたる 2017 年度は①前年度の追跡調査、②国内での成果発表、 ③シンポジウム企画、④書籍出版であった。
① 追跡調査については、合計 30 名の調査を行なった。
②国内外成果発表については、国際語用論学会において、“Confronting imbalances in interaction: A case study of interview narratives of Japanese women living in the UK in the intercultural situations”を発表した。国内学会では、動的語用論研究会で「揺れ動くアイデンティティ―相互行為の場における排除と同化の語用論―」を、社会言語科学会、日本語用論学会など、合計 12 本の発表を行った。
③ “The Pragmatics of “Bonding”in Cross-Cultural Encounters: East Asian Perspectives”と題して国際語用論学会でパネルを企画し、人がどのように与えられた文脈の中で繋がりを保つのか（保たなければならないのか）について建設な議論を行った。更に、談話研究会、ナラティブ研究会、その他のフプロジェクトとも共同して成果発表を行った。
④ 成果の出版については、3 冊の書籍にまとめられた。まず、『出産・子育てのナラティブ研究-日本人女性の声にみる生き方と社会の形』(共著、大阪大学出版会)当プロジェクト独自の 1 冊となっている。『コミュニケーションを枠づける-参与・関与の不均衡と多様性』(共編著、くろしお出版)、『話しことばへのアプローチ』(共編著、ひつじ書房) はプロジェクト代表者が編者・著者の 1 人として、本プロジェクトが、著作の一角をなしている。

本プロジェクトを総括すると、移民問題を家族の問題に拡げ、そこから排除や序列の構造といった新たな社会秩序を見出した。この調査から、多文化共生の先進国に見えていた英国社会は排除の構造も併せ持ち、Brexit はそれが顕在化する契機になったと言える。このような急激な社会変動の中で、移民としての彼女らが新たな立ち位置作りをする様子、教育への懸念が観察された。また長期にわたる本調査の利点として、調査協力者の人生の移り変わりやその子供の成長、教育問題などにも関われた。
今回 Brexit が偶然にもプロジェクトの間に発生したことで、研究に飛躍的な発展が見られた。今後もこのプロジェクトを継続し、移民問題、排除の構造、社会の序列化を、そこに生きる生活者の目線から研究する手法を確立するため、研究を続ける予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

① 砂川千穂・秦かおり・菊地浩平「Beyond the Gap ―コミュニケーションによる「異なり」はどう処理されるのか―」、社会言語科学会第 40 回大会発表論文集、pp. 222-231、2017 年 9 月.
② 秦かおり「震災を物語る-日英マス・メディアにおける「記憶」の表象とイデオロギー-」『相互行為研究(3)：メディアと談話』言語文化共同研究プロジェクト 2016、pp. 11-21、2017 年 5 月.
③ 秦かおり「ロンドンインタビュー調査にみる imaginary Japan -国際結婚家庭における教育の選択をめぐって--」、社会言語科学会第38回大会発表論文集、pp. 197-199、2016 年 9 月.
④ HATA, Kaori, Redressing imbalanced positioning through narrative. In G. Brooks, M. Porter, D. Fujimoto, & D. Tatsuki(Eds.), *The 2015 PanSIG Journal* (pp. 51-57). Tokyo, Japan: JALT. 2016 年 5 月.
⑤ 秦かおり「『保育園落ちた』問題の拡がりにみる間メディア社会の今日性：ブログ・Twitter・国会答弁・デモ行動にみるナラティブ性とメディア分節不可避性」『相互行為研究(2)：社会と文化、アイデンティティー』言語文化共同研究プロジェクト 2015、pp. 11-22、2016 年 5 月.
⑥ 秦かおり「在英邦人との国際結婚家庭における家庭内言語政策とその実態調査」(、社会言語科学会第 37 回大会発表論文集、

pp. 72-75、2016 年 3 月.
⑦ 秦かおり「インタビュー・ナラティブにおける不均衡の是正」、第 33 回日本英語学会 Conference Handbook、pp.13-16、2015 年 11 月.
⑧ 秦かおり「日常の物語を分析する--スモール・ストーリーへの招待--」『α-Synodos』Vol 183, pp. 57-80.2015 年 11 月.

〔学会発表〕(計 26 件)
① 秦かおり「日常会話コーパスにみる大人と子供の相互行為:参与構造の創発と動的プロセスをみる」シンポジウム「日常会話コーパス」III、於：国立国語研究所、2018 年 3 月 19 日.
② 砂川千穂・秦かおり・菊地浩平「談話実験における言語行動と非言語行動の相関関係－ビッグ・ストーリー確認作業を事例に－」第 41 回社会言語科学会研究大会、於：東洋大学 2018 年 3 月 10 日.
③ 秦かおり「英国の危機、在英邦人移民の危機 － Brexit が起こした波紋を「語り」から考える」大阪大学第 2 回豊中地区研究交流会、於：大阪大学、2018 年 1 月 10 日.
④ 秦かおり「タスク達成場面における共同行為―折り紙場面を事例に―」第 20 回日本語用論学会大会、於：京都工芸繊維大学、2017 年 12 月 16 日.
⑤ 秦かおり「揺れ動くアイデンティティ―相互行為の場における排除と同化の語用論―」動的語用論研究会、於：京都工芸繊維大学、2017 年 10 月 1 日.
⑥ 砂川千穂・秦かおり・菊地浩平「Beyond the Gap ―コミュニケーションによる「異なり」はどう処理されるのか―」第 40 回社会言語科学会研究大会、於:関西大学、2017 年 9 月 17 日.
⑦ 秦かおり「結び直される記憶：メディアにおけるナラティブ性と HIROSHIMA の集合的記憶」第 49 回メディアとことば研究会、於：大阪大学、2017 年 9 月 16 日.
⑧ HATA, Kaori“Memories” in Hiroshima and Fukushima: A Case Study of Recontextualisation by the Japanese Mass Media”、IPrA、Belfast Waterfront Centre、Northern Ireland、2017 年 7 月 19 日.
⑨ HATA, Kaori & Satoh, Akira‘How to construct “memory”: Stories of the nuclear events from Hiroshima to Fukushima”、IPrA、Belfast Waterfront Centre、Northern Ireland、2017 年 7 月 19 日.
⑩ HATA, Kaori “Confronting imbalances in interaction: A case study of interview narratives of Japanese women living in the UK in the intercultural situations” (with Takako Okamoto)、IPrA 、Belfast Waterfront Centre 、Northern Ireland、2017 年 7 月 18 日.
⑪ HATA, Kaori & Ide, Risako“The Pragmatics of “Bonding” in Cross-Cultural Encounters: East Asian Perspectives” 、IPrA 、Belfast Waterfront Centre、Northern Ireland、2017 年 7 月 18 日.
⑫ 秦かおり「本当は不均衡な私たち―ママ友の語りにみる参与の創発性と多層性―」『創発的参与構造の解明と類型化』公開研究会、於：国立国語研究所、2017 年 3 月 16 日.
⑬ 秦かおり「インタビュー・ナラティブにみる排除・調整・共感の達成：在英日本人移民が語る EU 離脱騒動から「共生」を考える」『ナラティブ（語り）研究の社会貢献を考える』ラウンドテーブル、於：龍谷大学、2017 年 3 月 9 日.
⑭ 秦かおり「記憶」の再文脈化とマス・メディア： 日英ドキュメンタリー番組にみる東日本大震災の描き方」談話研究会、於：大阪大学、2016 年 12 月 21 日.
⑮ 秦かおり「被災者証言集における「記憶」としての震災：日英マス・メディアによる再文脈化の対照研究」（シンポジウム）日本英語学会、於：金沢大学、2016 年 11 月 12 日.
⑯ 秦かおり「ロンドンインタビュー調査にみる imaginary Japan -国際結婚家庭における教育の選択をめぐって--」社会言語科学回第３８回大会、於:京都外国語大学、2016 年 9 月 3 日.
⑰ HATA, Kaori & Kataoka, Kuniyoshi, “Managing imbalanced positioning in narrative: How “involvement” can betray normal assumptions” （コロキアム登壇者共同発表、片岡邦好と共に）、Sociolinguistic Symposium 21、於：ムルシア大学（スペイン）、2016 年 6 月 18 日.
⑱ 秦かおり「多様な患者像の理解を目指して--在英邦人の出産体験ディスコースを事例に--」(単独ポスター発表)、日本ファーマシューティカル学会、於:名城大学、2016 年 5 月 29 日.
⑲ HATA, Kaori “L2 Teaching at home: FLP in multicultural situation” 、2016 PanSIG、於：名桜大学、2016 年 5 月 21 日.
⑳ 秦かおり「在英邦人との国際結婚家庭における家庭内言語政策とその実態調査」、社会言語科学会第 37 回大会、於:日本大学、2016 年 3 月 19 日.
㉑ 秦かおり「インタビュー・ナラティブにおける不均衡の是正」(招聘発表)、日本英語学会第 33 回大会　於:関西外国語大学、2015 年 11 月 21 日.
㉒ 秦かおり「ナラティブのマルチモーダル分析：日本は何故，産み育てづらいのかを日本の外から議論する」,(シンポジウム登壇者), 第 8 回質的心理学会, 於：宮城教育大学, 2015 年 10 月.
㉓ HATA, Kaori “How can interview

narratives be resumed after unexpected interruptions generated by children?, ” (パネル登壇者), 第 14 回国際語用論学会, 於：アントワープ (ベルギー), 2015 年 7 月.

㉔ Okamoto, Takako & HATA, Kaori “Indelible Japaneseness: A Case Study of Interview Narratives on the Great East Japan Earthquake by the Diaspora Japanese in London,” (パネル登壇者), 第 14 回国際語用論学会, 於：アントワープ (ベルギー), 2015 年 7 月.

㉕ HATA, Kaori “How can interview narratives be resumed after unexpected interruptions generated by children?,”, 名古屋社会言語学研究会, 於：名古屋大学, 2015 年 5 月.

㉖ HATA, Kaori “Redressing Imbalanced positioning in the Narrative, ” (パネル登壇者), Pan-SIG 2015, 於：神戸市外国語大学, 2015 年 5 月.

〔図書〕(計 8 件)

① 秦かおり「それは排除か協調か–語りの動的仕組みを考える」、『＜不思議＞に満ちた言葉の世界』(上)、高見健一・行田 勇・大野英樹編、開拓社、pp. 130-134、2017 年 3 月.

② 片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編)『コミュニケーションを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性』、くろしお出版、2017 年 2 月.

③ 片岡邦好・池田佳子・秦かおり「参与・関与の不均衡を考える」『コミュニケーションを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性』、片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編)、くろしお出版、pp. 1-26、2017 年 2 月.

④ 秦かおり「対立と調和の図式–参与者間不均衡是正のためのディスコース」、『コミュニケーションを枠づける—参与・関与の不均衡と多様性』、片岡邦好・池田佳子・秦かおり (編)、くろしお出版、pp. 131-154、2017 年 2 月.

⑤ 秦かおり・岡本多香子・井出里咲子 (著)、『出産・子育てのナラティブ分析—日本人女性の声にみる生き方と社会の形』、大阪大学出版会、2017 年 1 月.

⑥ 鈴木亮子・秦かおり・横森大輔 (編)『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦—』、ひつじ書房、2017 年 12 月.

⑦ 秦かおり「『みんな同じがみんないい』を解読する—ナラティブにみる不一致調整機能についての一考察」、『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦—』、鈴木亮子・秦かおり・横森大輔 (編)、ひつじ書房、pp. 219-250、2017 年 12 月.

⑧ 片岡邦好・秦かおり「第 2 部「話しことばの言語学」実践編」『話しことばへのアプローチ—創発的・学際的談話研究への新たなる挑戦—』、鈴木亮子・秦かおり・横森大輔 (編)、ひつじ書房、pp. 107-111、2017 年 12 月.

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
秦かおり (HATA, Kaori)
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：50287801

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
なし